

## 110 学年度第一学期 Eurasia 基金会国際講座

### 「アジア共同体：東アジア学の構築と変容」系列講次(15)

#### 講題：台湾：現代客家文化の発展の中心地

中国文化大学 110 学年度 Eurasia 基金会国際講座第 15 回は、国立中央大学客家語文暨社会科学系の張翰璧特聘教授による「台湾：現代客家文化の発展の中心地」である。最初に張教授は台湾で「客家研究」の概念が徐々に形成され、2003 年には中央大学客家学院が成立したことを語った。同年に教授はそこで職務に就き、客家の学術基礎と知識体系の構築に尽力し、社会科学の観点に立った族群、移民理論から客家研究に取り組んでいる。張教授はまず東南アジアの客家研究から入り、香港の客家研究に注目した。近年の客家研究は、客家学院の成立、台湾から各地の団体との連結、文化の輸出など発展成熟しており、台湾は現代の客家文化の発展の中心地とすることができる。

#### 近代「客家」概念の形成：移民と西洋伝道師

張教授は最初に歴史的脈絡をたどり近代客家概念の形成について述べた。「客家」の概念の起源は 15-16 世紀に閩、粵、贛の山から下山し、「客」と称された一群の人々にある。移民理論から見ると、1850 年前後の客家も「移民」現象であるが、族群という概念ではない。この時期を分水嶺に、当時の中国華南地方が政情不安定だった影響から、移民の流れは加速された。客家人は山下や海外へ移動した。この移民の過程で徐々に族群を形成し、分類されていった。政治経済学の観点から見ると、移民＝客人で、当時は政治経済的な地位も高くなかったために「客仔」とも呼ばれた。もう一つ重要な歴史的要因は西洋の伝道師が客家地域で布教したことである。ドイツの宣教師は彼らの中に一つの言語があり、その文化習慣が広東地方と違うことに気づき、客家地域の人々の研究を進めていった。客家の英語名《Hakka》はすなわち西洋の伝道師による布教過程から得た基礎知識である。それゆえ客家の最も早い知識体系は 19 世紀の伝道師が形成したものと言いうことができ、元来の呼称「客仔」は《Hakka》となった。

#### 客家研究発足の地香港

張教授は 1890 年代の植民地香港がかなり重要な伝教拠点だったと述べる。香港の教会は密集し、総督などは皆教会と緊密な関係にあったため、客家に関する知識の確立とネットワーク形成に影響した。1905 年に出版された『郷土歴史』は客家、福佬は非漢族、非越南種であると述べ、大きな論争を引き起こした。

1920年刊の『世界地理』もまた広東山地に客家のような野蛮な部落が多数あると述べた。また1911年客家籍の「学者移民」である頼際熙と羅香林が相次いで香港に移った。これによって香港における客家研究は重要な地位を確立することとなった。1930-50年代になると客家運動は大陸から香港へ移り、羅香林らの「漢人の客」という論述が香港商人の支持を得ていった。その中で香港崇正総会はかなり広いネットワークを拡張していった。例えば、日本崇正総会と香港崇正総会は密接な関係にある。東南アジア、アメリカの崇正総会は老華客団体の中心である。1970年代まで香港は客家研究の本拠地だった。

### 客家研究中心地の移動：種族論から族群理論へ、台湾の主体性の構築を背景に

1980年代に入ると、台湾の多元文化、戒嚴令の解除、社会運動の発展、主体性の確立により、台湾が徐々に香港客家研究を引き継いでいった。しかし、台湾と香港の客家研究は同じではない。第一に、香港は中国大陸の「非漢」的論調を受け継いでいるが、台湾はこの論以外に社会主体性、多元族群の影響による異なる次元の観点を持っている。第二に、社会ネットワークの発展が異なる。香港は商人を中心とした団体ネットワークであるのに対し、台湾は文化を基礎とした文化交流団体、学術文化団体が多い。第三に、社会科学から見ると、1960年代以前の香港客家研究は比較的「野蛮民族」と捉える研究が多かった。歴史学と種族論の角度から客家研究を見て、客家が原漢族の血統を具えていることを証明しようとしたのである。しかし、台湾客家研究が1970年代に盛んになると、「族群」を基礎に論証が行われた。張教授はさらに台湾の主体性構築に話を進めた。台湾の主体性の構築は1949年に始まり、1970-80年代の第二次経済発展によって労働者階級が出現し、労働組合運動、農業者運動、母語を返せ運動などの社会運動が続き、徐々に多元文化社会の基礎を形成していった。台湾の「客家研究」は当初はやはり歴史学、中国大陸と香港客家人の研究に多く集中した。しかし、90年代を過ぎると、台湾の客家研究は少しずつ「台湾客家」を論の主体とするようになった。2000年以後、社会科学の観点を客家研究に導入し、制度化を発展させていった。客家研究の基軸の変化と台湾の主体性の構築は並行して進んでいった。すなわち台湾社会の主体性、台湾の観点に立った客家研究である。これがそれまでの客家研究と異なる点である。

### 台湾から世界へ：主体性と多元性を以て発展する超域的客家研究

張教授は台湾社会の主体性、多元性に客家研究発展の基礎があり、多元文化を顧み、強調するので、「客家本位」の知識の仮説に陥らないと述べる。台湾の客家研究は多元的、超域的で、歴史学、人類学、社会学、公共行政、メディアなどの領域に及んでいる。それゆえ、さらに広い視野を以て、従来の客家研究

では未知の観点で見ることができる。また客家委員会と客家研究機構の提携により、指導者の育成と制度の整備に対して客家研究の推進は制度上の意義もある。これを基礎に台湾客家研究は主体性を持ち、東南アジア、全世界の華人社会を認識する方法となり得るのである。客家には独特の方言群、族群があり、族群相互の動向からその社会過程を観察できるため、客家および華人社会の同質性と差異性、在地化を見ることができる。未来を展望して、張教授はこう述べる。台湾客家研究から東南アジア、全世界の客家、華人の在地化研究、すなわち東南アジアと世界の族群、移民研究、異なる国家の政治経済社会などの研究へ進むことができると。講義の最後に、張教授は2023年に台湾で「世界客家博覧会」が開催されることに言及し、この博覧会を通して客家が台湾と世界で異なる顔を持った一個の族群として見ることができると述べている。

(Web サイト: <https://eurasia.pccu.edu.tw/index.php>)

(撰稿: 黄馨儀・日文系副教授)

(日本語訳: 塚本善也・日文系副教授)